

西鶴と芭蕉

談林克服への姿勢と背景をさぐる

神堀貞子

先師曰、世上俳諧の文章を見るに、或漢文を倭名に和らげ、或は和歌の文章に漢章を入、詞あしく賤くいひなし、或人情をいふとても今日のさかしきまゝ迄探り求め、西鶴が浅ましく

下れる姿あり。我徒の文章は、槌に作意をたて、文字は譬ひ漢章をかるとも、なだらかに云つゞけ、事は鄙俗の上に及ぶとも、懐しくいひとるべし、と也。

いうまでもなく、『去来抄』所掲の俳諧の文章についての芭蕉の教えである。この一文によつて、われわれは、測らずも芭蕉の西鶴評を窺い得るのである。芭蕉が、西鶴の文章を、「今日のさかしきまゝ迄探り求め」と見抜いたのはさすがに適切であるし、又それを「浅まし」と断じているのは、彼の立場としてまことに当然である。しかも、その上でわれわれがもつとも大きな興味をそそられるのは、西鶴が、文章はたとえ「詞あらく賤しく」とも、当時の人情の「さかしきまゝ迄探り求め」得たということなのである。

しかるに、その点で芭蕉が西鶴を嫌悪しなければならなかったとすると、両者を隔てる多くの要素が、ついにここに凝縮したのだという感がするのである。それほど、この両者は、多くの面で対蹠的な現れ方をするのである。

この二人は、全くといつてよいくらい、ほとんど同じ時代に生きた。しかも、その文学活動の初期には、談林俳諧の開拓者としての自覚なり自負なりをそれぞれ持っていたのである。このように、外見には同様の出発点にいた二人ではあったが、その文学史上に残した仕事そのものは、実に対蹠的である。芭蕉は中世を貫く伝統的価値観を俳諧に導入し、ついに蕉風を樹立した。そしてさらに、より新しい文学上の境地を目指して変化し続けた。文学における一つのジャンルの可能性を、自己の可能性に賭けて、彼ほど冷静に、かつ意識的にそれを開拓しようとした人間は、国文学史上でも数少ない存在であろう。

一方、西鶴は天和から元禄に至る衆庶の生活を、飽きることなくその特異な文体で描破し続けたのである。しかし、その作風の変遷

は、芭蕉に比較して、何と非理論的・非段階的に見えることか。芭蕉における作風の変遷は、その必然性が誰にでもただちに納得できるが、西鶴の作品に現れる作風の変化は、彼の自覚しなかつた面まで立入って考察して、始めて納得されるというふうな性格をもっている。そして何よりも重大で顕著なことは、芭蕉が生涯を俳諧一筋に貫いたのに、西鶴はそれを果し得なかつたということなのである。

そこで、以下近世文学の最盛期を現出した強烈な個性が、どのような背景の中で成立しているかを、できるだけ対比的に把えてみようと思う。

二

西鶴と芭蕉が、外見的にはほぼ同様の出発点にあつたことはさきに述べた。われわれがこの二人を文学史上に発見するのが、少壮気鋭の談林俳人としてであつたからである。もちろん、お互に直接には何の交渉もなかつたが、貞門の俳諧の沈滞に我慢し切れなかつたという点では共通している。しかし、この二人の談林俳諧への姿勢は、もうすでに明かに異なるものがある。

一身上の激変を契機として江戸へ出た芭蕉は、ほとんど大した苦悩なしに談林の世界へすべり込んで行つたらしい。(註1)彼の教養とありあまる才気は、談林的俳諧師として立つには充分であつたし、かつ又、その世界は彼にとつて、武士を捨て去るほどの魅力をももっていると思われた。しかし、実際の俳諧師の生活は必ずしも誇りに満ちたものではなかつた。又、談林の勢力が上方ほどでなく、人々の気風も上方とは異なる江戸という地理的条件は、上方を中心

とするあまりに町人的な、談林を批判する方向へと芭蕉を導いて行つた。

これに反して、西鶴は談林の新風を、いわばみずからものとして闘いつたのである。『生玉万句』の序における新風宣言の誇らしきは、西鶴の姿勢をはつきり示している。このようにして得た談林俳諧からはみだして、西鶴はなぜ浮世草子の世界へ入つて行つたのだろうか。この西鶴の俳諧から浮世草子への展開は、新興町人の欲求、すなわち新しい題材を手当り次第に蒐集しようとする談林俳諧を卒業して、もつと具体的な姿、もつと全体的な規模において町人生活をとり上げようという積極的な発展だとするみかた(註2)を乗り越えて、逆に新興町人階層の人間形成の挫折点において、町人階級の人間的可能性を主張しようとしたとき浮世草子という小説ジャンルを必要とした(註3)と言われている。

さらに考えられるのは、西鶴自身の個人的な事情である。たしかに、談林俳諧は大阪の新興商業資本を背景とする町人たちによつてうら樹てられた。そして、町人社会に受け入れられたばかりではなく、たちまちのうちに大衆化したのである。

されば和歌は和朝の風俗にしてうくひす蛙までも其声其すかたなり。いはんや生ある人の此心ざしなくて有へからず。時に連歌の掟をゆるかせにして俳諧といふもこれ哥道の一躰なり。むかしは世を隙になす人あるひは神主又は武士のもてあそびにして有けるを。ちかき年世上にはやり過人のめしつかひの小者下女までもいたさぬといふ事なし。惣して芸事すゑ／＼の手に渡りて捨れるためし有。(『織留』巻三ノ二「芸者は人をそしりの種」)

はやり過ぎた俳諧は、いい加減な点者を輩出した。

今時の点者といふをみればきのふまで馬は生類になりまする。牛は闇に二句嫌ふかたつね。はなひ草口から四枚も覚えぬ者が、菓子袋に押やう成印判をこしらへ軒号にびくりさせ。一句一銭の点取に読ぬ所は評書なしに付墨し。鹿のうちこしに紅葉鳥をしらず。有馬の湯は水辺に成事も。鴟は俳諧やら鳥は連歌やら。何をひとつ聞分る事なし。作者唐人なればこそ其まゝに濟ことなれ。(同右)

爰に小商ひしてゆるりと渡世する人わづかに俳の道をのぞきしに。うは気なる若ひものども宗匠になれとすゝめ。俄に法体させひきしきなじみの妻を親里にもどし。浮世の隙になして後連衆ひとりも取もたず。世わたりの種つきて二たび髪を延るまでとて。夜々花火線香を売けるが。秋よりさきはしらず。(『名残の友』巻三ノ四「さりとは後悔坊」)

つまり、俳諧は大眾の中でよれよれにもてあそばされたのである。しかし、このようになってしまふ原因は、談林俳諧自体の中にひそんでゐる。談林の総帥たる宗因は、俳諧を「好いた事して遊ぶにはしかじ、夢幻の戯言なり」(『阿蘭陀丸二番船』)という。西鶴もまた俳諧を「もてあそび」とみた。

守武宗鑑を俳諧の父母ともいへり。是も和歌の一ていなれば神國のもてあそびによろし(『名残の友』巻一ノ一「美女の摺小木」)

和歌は和国の風俗にして、八雲立御国の神代のむかしより今に長く伝て世のもてあそびとぞなれり。其はしくれ連俳諧は……

(『独吟百韵自註絵巻』)

とは言え、宗因の「好いた事して遊ぶにはしかじ」と西鶴の「もてあそび」とは必ずしも同じではない。宗因の言葉には一種の無責任なひびきがあるが、連歌を本道とした宗因としては当然であつたろう。事実、宗因は談林の混乱を見捨てて連歌の世界へ帰つて行つてしまふのである。西鶴の「もてあそび」は、事実上は「もてあそび」の範圍をぬけ出したものであつた。俳諧に注いだ彼の情熱は決して生半可なものではなかつた。それは彼の半生をかけたものであつたが、それでも西鶴は「もてあそび」としかいへなかつた。それは、宗因が連歌や和歌に対して俳諧を「戯言」と規定したのとは、少少ずれるところがある。

又吾人は泉州堺の者なりしが万にかしこ過て芸自慢してこゝにくだりぬ。手は平野仲庵に筆道をゆるされ。茶の湯は金森宗和の流れを汲詩文は深草の元政に学び連誹は西山宗因の門下と成、能は小畠の扇を請鼓は生田与右衛門の手筋、朝に伊藤源吉に道を聞、ゆふべに飛鳥井殿の御鞠の色を見昼は玄齋の暮会にまじはり、夜は八橋檢校に弾ならひ一節切は宗三に弟子となりて息つかひ、淨るりは宇治嘉太夫節おどりは大和屋の甚兵衛に立ならび、女郎狂ひは嶋原の太夫高橋にもまれ野郎遊びは鈴木平八をこなし、噪きは両色里の太鼓に本透になされ、人間のする程の事其道の名人に尋ね覚え何をしたらばとて人の中に住べきものをと腕たのみせしが、かゝる至り穿鑿当分身過の用には立がたく、十露盤をおかず秤目しらぬ事を悔しかりぬ。武士つとめは勝手をしらず、町人奉公もおろかなりとして追出され、今此身になりて思ひあたり諸芸のかはり身を過る程をおしへおかれぬ親達をうらみける。(『日本永代蔵』巻二ノ三「才覚を笠に着る

右は、品川の東海寺門前の乞食の中の一人の身の上ばなしで、伊藤仁齋の講義から色遊びまでを列記して、一種のおかしみをねらったものではある。しかも、社交や芸能に通じながら、結局器用貧乏とでも言うべき男の無能ぶりを描いているのである。一体に西鶴は、浮世草子の中で、謡曲・蹴鞠・楊弓・琴・笛・香・茶の湯等々の、およそ当時行われていたあらゆる芸能と俳諧とを、しばしば同一線上に並置することが多い。彼が、町人の稼業である商行為に對置して、これらを「もてあそび」とみていることはわざわざことわるまでもなからう。しかし、息苦しい封建社会の中にあつて、町人が人間的な解放感を味わうことのできるのもまた、これらの「もてあそび」の中であつた。このことは、西鶴が「もてあそび」の語を、

されば諸色の遊興いきとせ生る人またもなきもてあそびなれば
 ……(『梔久二世の物語』上巻第三話「又来る事のならぬ詠め」)
 男色ほど美なるもてあそびはなきに…(『男色大鑑』卷一ノ一
 「色はふたつ物の物あらそひ」)

と使っているのを見てもわかるだろう。そして、これらの「もてあそび」は、深入りすればするほど町人としての身を破るものであつた。東海寺門前の乞食がすでにそれである。その他、西鶴の浮世草子には芸事で身を破つたものの話が数多く記されている。つまり、「もてあそび」に深入りすることは、町人としての資格を失うということでもあつた。それによつて一家一流を樹て得れば、それに越したことはない。しかし、そういうことは極く稀だと思わなければならぬのである。

談林俳諧の流行が俳諧の墮落につながつていたことはすでにみて

きたが、西鶴は俳諧師であつた。俳諧師であるからには、俳諧の流行を願わねばならぬ。しかも、一流の俳諧師としての誇りは、その墮落を黙視することが出来ない。「もてあそび」であるにしろ、才能や余裕のあるものが、その才能を花開かせ、余裕をたのしむためのもでなければならぬ。前出の「芸者は人をそしりの種」(『織留』の一節の「いはんや生ある人の此心ざしなくて有へからず」と、「忽して芸事すゑ」の手に渡りて捨れるためし有」とが矛盾するのは、西鶴の俳諧師としての誇り(註4)と、現実の俳諧との矛盾を露呈したものであつた。そのうえ、ただ「すき」というばかりに、町人から没落して行くものさえるのである。宗因は黙して連歌へ帰ればそれですむが、町人である西鶴はそうすることもできなかつた。そこで西鶴は墮落した俳諧を救うために、俳諧を一般人の手のとどかぬところへもつて行こうとする。西鶴が矢数俳諧を興行せねばならなかつた心理的必然性の一つは、ここに存在するのである。

とにかく、西鶴は矢数俳諧が俳諧の価値を高めるものと考へていた。このことは、『西鶴大句数』の序や、四千句独吟後の下里勘州宛の書簡によつて証せられる。しかし考へてみれば、矢数俳諧というものは、作者が一方的に読者に對するといふかたちをもつ。それは確かに一般人の手にはとどかぬものである。誰しもが矢数俳諧を行うなどとは考えられないのである。西鶴自身は一応それで安心できたわけである。このように、特殊な才能をもつものが、一般人に對して一方的に「もてあそび」を提供することができたなら、俳諧の墮落をも防ぎ、身を破る人々をも救えるのではないか、というような考えが西鶴になかつたとは言えないのである。

彼が浮世草子作者として、いわば一方的な「もてあそび」を提供

する心理的必然性は、俳諧の一般化自体の中にもひそんでいたの
ある。

三

西鶴は、本来「もてあそび」であるはずの俳諧の点者である。い
うまでもなく、俳諧の点者たるべくその生涯の多くを費したのであ
る。しかし、西鶴は完全に俳諧師になり切ってしまうことができな
かった。つまり彼は、意識下では、俳諧師であるよりも商人であり
町人であったからである。それは、芭蕉が生涯武士的矜持を離れる
ことができなかったと同様、西鶴の宿命であった。このことは、西
鶴がただ単に、町人的人生観をもっていたとか、町人的思考形式を
離れることができなかったとかいうふうなことを意味するに止まら
ない。すなわち、西鶴は俳諧の点者として立った途端、他の階層出
身の俳諧師から意識的に差別される危険をもっていたということに
なるのである。

貞徳・宗因・芭蕉と、俳諧の三大流派における開祖たちは、いず
れも武家の出身者である。多くの人を指導するに足る学識・教養は、
やはり正統の教育を幼時より厳しく受けることができた武家の方が
町人にすぐれていたことはいうまでもあるまい。町人の経済力の伸
展とともに、多くの町人達が自由に学芸を享受できるようになった
とはいえず、特殊な階層をのぞいては、武士と全く同じような教育を
受け得る町人は少かったのである。例えば芭蕉の場合、彼の俳諧入
門がどのような契機からであったか不明であるにしろ、一旦主君卿
吟の俳諧の相手として選ばれた以上、俳諧はただちに芭蕉にとって
本務の一つとなったであろう。そこに、幼いながら、俳諧を学ぶ芭

蕉の真剣さが生まれよう。

しかし、町人の場合、どのように富裕な町人の子弟でも、俳諧を
習ってただちに頭角を表わす必要はそれほどないのである。それは
いわば、将来の社交のための道具であり、一生のなぐさみとしての
教養にすぎないのであって、ほどほどに習わせることが大切である。
特に幼時から和漢の基本的教養をたたき込まれていないというこ
とは、俳諧の習得にも不利であったことを意味する。一般的にいって、
習得する本人が、いかに真剣になったとしても、どこかで壁につき
あたるのは当然である。そこで、金と時間を費した結果、先掲の『
永代蔵』に描き出された「泉州堺の者」のような人間が増えてくる
わけである。金と時間さえかければ、一応その道の名人の手引きは
得るにしても、一芸に到達することは、特に町人の場合困難であっ
たといえるのである。

記憶力・連想力・表現力など多くの面において人に勝れていた西
鶴ですら、典拠の引用、用語・用字の厳密性など、ややもすれば教
養の限界を感じるが多かったであろう。『生玉万句』における
序は、そのことを示しているようである。

或問何とて世の風俗しを放れたる俳諧を好る、や答曰世こそつ
て濁れり我ひとり清り何としてかその汁を嘔り其糟をなめんや
問曰文盲にしてその功成かたし答曰六祖は一文不通にしてその
伝を継如何しか其分あらん

反逆の気取りにしろ、わざわざ「文盲にしてその功成りがたし」と
自問しなければならなかった、当時の西鶴一派の内的な立場が
思いやられるのである。(註5)

俳諧の上で、西鶴が独吟からその延長線上の矢数俳諧へと趣いて

行ったのも、右のような自己の内心にある劣等意識と、強い自負心との相剋の結果でもあった。つまり、古典的教養を傘に着る古流の俳諧師たちと自分との間に存在する、違和感や差別意識等の、目には見えないがそこにはつきりと存在する障壁に対して、具体的な形あるもの、つまりは確実な証拠をつきつけて、自己の存在の優位を認めさせようと躍起になったのである。彼の行動性と意欲は、性格の激しさと相俟って外向的な形で、この矛盾を解決しようとした。そして、それが矢数俳諧興行という、大がかりな見世物的方法と、数量の証拠の呈示となって現れてきたのである。なるほど、一昼夜二万三千五百句の独吟は、いずれの研究者も指摘するように、「芸術的には多くいふに足らざるもの」(註6)であったにしろ、そういう形でしか自己を表現できなかった彼の立場は、われわれにも納得できるのである。矢数俳諧を、「上昇期資本主義時代の町人意識がもつとも昂揚された芸術様式」(註7)とし、西鶴をその新興町人階級の代弁者とする見解もあるが、西鶴が矢数俳諧に到る過程をたどるとき、この考え方はあまりに樂觀的に過ぎるようである。

ところで、右のような意味で自己を表現する必要のなかった芭蕉は、実に何層倍も西鶴より幸福でもあり恵まれてもいたはずである。芭蕉が江戸で初期の門人達の信頼を勝ち得たのは、彼の人格と才能によるものであったとしても、やはり、その武家出身であることと、それによって身につけた教養がものをいっただけであろう。町人でさえ、江戸と大阪ではおのずから気風が異なる。まして、武家や武家出入りの町人たちと交渉のあった芭蕉である。初期の不遇であった十年間でさえ、一種の好意的な期待の中で、自己の人格と学芸を醸成することができたのは、彼が武家出身であり、彼をとりまく人々も多分

に武家的教養を基底としていたことと無関係ではない。思えば、芭蕉が西鶴のように独吟を成さなかったのは、先にもふれた主君蟬吟を念頭に置いた俳諧の初歩学習によって、徹底的に相手を生かすすべを身につけたこととともに、彼を理解し、協調しようとするよき連衆に恵まれたからにはほかならない。それはいうまでもなく、芭蕉が連衆それぞれの個性を生かしつつ、それを統率することのできる天性の指導者であったからにはほかならない。とにかく、信頼と尊敬によって結ばれ響き合うことを希望する連衆がいなければ、芭蕉がいかに優れた指導者であっても、彼だけでその俳諧を完成させ得なかったことは確かである。しかし、西鶴が芭蕉におけると同様の意味での連衆を生涯もちもせず、又厳密に言って持とうとしなかったことは、今後もおお考えて行かねばなるまい。

結局、西鶴は自己が衆に勝れていることを、常に外部に向けて証明し、主張しなければならなかった、と言えるであろう。そこで俳諧、特に蕉門のそれのように、相手の個性を生かし尊重して、一人のもっているものだけでは切り開くことのできない複雑な世界を表現しようとするのができなかつたのである。西鶴は、往々にして早口で言い捨てにするとしようふうな態度で句をよんだことが多かったらしいが、とっさの句吟で鬼面人を驚かすのもまた、生来の頭の回転の早さと同時に、一座における存在を人に認めさせようとする習いの現れとみてよい。西鶴のこのような態度は、俳諧師としてみずからを際立たせる職業意識だけで説明するのは不当である。封建社会における町人が他の階層に対する潜在的な意識と、町人同志における関係を明かにしなければ説明し切ることができないのである。

ともあれ、俳諧師が俳諧を離れて、面白おかしい話をとりあつめて人に読ませるといふことも、考えてみれば人を驚かせるに足ることである。西鶴の内面には、常に人の意表を衝く行動をなきしめる動機が強く働いていたのである。それはすでに眺めて来たように西鶴の心理的な必然性からみて、決して不自然なことではなかった。

俳諧にあつては、鑑賞者はただちに作者である。つまり、何人も作者としての見地から鑑賞者となる場合が多い。しかも多数の作者を擁していた当時の俳壇である。どんな新しい作風も、間もなく新風ではなくなるのである。西鶴が滑稽と思われるほどに矢数俳諧の記録に拘泥したのも、芭蕉がマンネリズムに陥いるのを常に何よりも警戒したのも、無数の作者に追われているという不安を根底としている。特にみずからの俳風を積極的に刷新しないで、しかも他人の追隨を許さない世界を願うとしたら、俳諧の中で俳諧を離れることしか方法がない。ここにおいて、西鶴は自身だけが作者であり、他のすべての人々、同等の立場にある連衆さえをも単に読者の位置に置く浮世草子の執筆に進んだのである。というよりは進まざるを得なかったのである。

四

西鶴と芭蕉の都市に対する姿勢もまた、大きくへだたるものがある。談林俳諧があまりに都市的であったことは、事新しく述べるまでもなからう。それは、談林俳諧の発生に遡っていい得るところであり、西鶴についてもまた都市性を離れて論じることができない。われわれの知り得る限りでは、西鶴は大坂の出身であつて、その生涯の多くは大坂で過ごしたらしい。

この時代では、都市在住の町人と在郷農民との間には、すではつきりした一線が引かれていた。すなわち、都市在住の町人は農耕生活とは一応遮断されて、新たな消費階級として、その存在を認められてきたわけである。そしてそこに、長らく日本文学の主流を占めてきた、自然と人間との深いかわり合いとは縁遠い文学の出生をみるのできるのである。

一方、武士の多くは、都市とさまざまの関係を保ちながらも、国元を本拠とするのがたてまえてあつた。芭蕉もまた、致仕後長く故郷を離れ、多年江戸に居住することになるのであるが、それでも帰るべき故郷があつたのである。どのような意味にしろ、帰るべき故郷があるということは、彼の都市に対する身構えを決めるのに大きな意味をもつていたはずである。なによりも、芭蕉は都市の喧騒に興味を示さなかつた。というよりは、都市に附随する喧騒や、消費文化のあまりに物質的なあり方を意識的に忌避している。そして、このような態度を示したのは、芭蕉が大都市以外の生活のもつ意味を知っていたからにはかならない。当然大都市の喧騒を逃れようとするさまざまの姿勢も生じて来ようというものである。

大坂に生れ、大坂に育ち、都市以外に帰るべき故郷をもたなかつた西鶴には、都市そのものを逃れるなどということは夢にも考えられないことであつた。いな、もっと積極的な意味で、人間らしい生活の唯一の基盤と考えていたらしい。

同じ人間のうまれ所田舎住ひのいと口惜 (『西鶴名残の友』巻四ノ一「小野の炭かしらも消時」)

といったり、
昔地の葛かづらなど踏分里の屋に入ば主がましき野夫の裂織と

いへる袖の佻しく、山刀をさして真柴手束ねて、湊の方に出て渡世すと見えて、若牛に鞍置童子鼻繩を携、破籠ようのものに篠の折箸、粟飯ものしみと見えて女は門おくりして、仕合の帰りをまつといふ、其声のふつゝかなるも、彼男の耳にはいかゞきくらん。かゝる縁にひかれて田舎も住よかるべしと、心の程おもひやられ：『懐硯』巻二ノ三「比丘尼に無用の長刀」等と山奥の生活を、まるで珍しいものでも見るような、妙な感心の仕方をしたりする。そこには都市に生活する人間の単純な誇り、いわば都市生活者における優越意識とでもいい得るものの存在がみられる。

この傾向は、特に浮世草子の第一作『好色一代男』に著しい。特にその前半は、都市生活者の他地方に対する優越意識の権化のような、世之介の目を通して眺めた地方描写、といつても決していい過ぎではない。すなわち、経済的充実と消費生活の充実を背景とした都会の、あらゆる面で洗練を重んじる生活意識を基準として、地方生活の不自由さ・泥くさを、いたるところで、ほとんど生理的な嫌悪をさえて批判しているのである。例えば、

…次第に月さへ物すこく、一羽の声はつまなし鳥かとなを淋しく一夜も只はくらし難し。若ひ蠻人はないかと、有ものになねかせてみるに、髪に指櫛もなく、顔に何塗事もしらず、袖ちいさく裾みちかくわけもなふ磯くさく、こゝちよからさりしを延齢丹などにて胸おさえ、昔し行平何ものにか、足さすらせしんきをとらせ給ひ、あまつさへ別に、香包衛士籠しやくし摺鉢三とせの世帯道具までとらされけるよと…（巻一ノ六「煩惱の垢かき」）

…前髪すくなくわけて水引にて結添、赤ひはな緒の雪踏をはき、懐のうちより手をさし入裙を引あげちよこ／＼とありくなりふりいやながら外に何もなければ…中略…：いま日が暮れて間もなき夜食、先蓋をあけぬれば、小豆食はおもしろひ、鯖きさみて穂蓼置合こそ心にくしと思へば、湯を吞まで終に香物を出さすすす、女郎は箸もとらず、上方の事誰がいふて聞しけるぞ、しほらしきと思へば、油火指にてかゝげ、それをすぐ小鬢につけしは笑はれもせず、腹おしなで居るに、又あるじの出で、後にひもじにならぬ程まいれといふ、返事もせず友とせし人仮寝を引起し、酒事になして此おかしさを忘る…：（巻三ノ五「集礼は五刃の外」）

等々、枚挙にいとまがないほどである。後半に及んでも、地方を描く場合には同様の態度が見られるし、都市でも、周辺の地や町の片隅にある岡場所等の描写は、同様に辛辣である。

以上のように、『一代男』は、都市における選ばれた人間としての満足感と、そこで養われた美意識を基準として、それに適合しないものを揶揄・嘲笑する。と同時に、表現面ではさかんに古典を滑稽化してはその権威を引ずり下ろし、一種の痛快感を味わっているのである。かような態度は、もちろん俳諧の延長にすぎないが、その底には、都市にたてこもった町人の、都市生活優越意識が強く働いている。極言するならば、西鶴をも含む上方町人は、都市の消費文化の優越性を、文学における優越性にあてはめ、かつはすり代えてしまったのであった。現実生活の物質的な豊富さまた便利さを、歴史的には過去の生活の不自由さと対比し、空間的には地方生活のそれと対比することによって、彼等の立場を位置づけようとするの

であった。

さくわけや難波について豊後梅

〔胴骨〕

類船や京江戸大坂三ヶの月

松意〔虎溪の橋〕

鯛は花は見ぬ里もありけふの月

〔高名集〕

……此朝詠のおもしろき、西行は何しつて、松嶋の曙、蛸瀧のゆふべを着つるぞ、きのふは、新町の暮を見捨、其目をすぐ、けふ嶋原の朝明、これが唐にもあるべきや。〔一代男〕巻七ノ七「新町の夕暮嶋原の曙」

たしかに、元禄を迎えようとするこの時期の都市町人の消費文化は、それまでの衆庶には許されたこともなかったような、華美で寛闊でしかも豪奢なものであった。事実、西鶴の作品に見られる町人達の衣食住の奢りは、それが現代のように機械的大量生産によるものでないだけに、われわれの目を見張らせるものがある。もつともその奢りは財を持つものだけに許された特権ではあったのだが。それゆえ、彼らの消費文化に対する自信も、あながち不当なものとは言い切れないのである。

しかし、その物質的優越性を、そのまま文化的優越意識——それは当然精神文化を支えとするものでなければならぬのだが——と結び付けたところに、西鶴を含む当時の上方町人達の、歴史的な精神文化乃至物質文化に対する樂觀的理解が存する。

世之介、初雪のあした、紙子羽織に、了佐極の、手鑑、定家の歌切、頼政が三首物、素性法師の長歌、其外世々のうた人の、筆の跡をつがせて、是を着る事、身の程しらず、もつたないし。〔一代男〕巻六ノ七「全盛歌書羽織」

財力によって自分のものとなった過去の遺産を、わがままに使用する

ることによってしか、みずからの存在を確かめ得ない態度もまた、先述の都市町人の考え方を端的に表わしているであろう。それらは、やはり彼らの文学を含む文化的な浅薄さとしかたええないものである。しかし、逆に考えると、このような伝統文化に対する理解の程度、すなわち、みずからの現在の文化的水準を最高のものとする楽天主義こそが、長い歴史を通じて人間を支配して来た宗教的な呪縛すらを無視する鍵であったことに思いあたるのである。

つまり、無邪気なまでに恐れを知らぬ心は、歴史的に見れば過去の文化を滑稽化するという結果を生じ、空間的にはみずからの生活環境をしか理解しないという、非常に即物的な都市生活者の優越意識の確信として現れてきているのである。そして、そこにこそ、西鶴の俳諧と浮世草子とを通じてみられる、一種痛快な破壊的姿勢を伴った力強さと、現実——もっぱら都市生活者としての立場からに限られるのであるが——に対するゆるぎない肯定的楽天的な態度が生れて来たのである。

五

以上のような都市町人の態度から、自然に対して西鶴のとった態度が、芭蕉とはどのように異なるかということも、おのずから理解されるであろう。かつて片岡良一が西鶴の自然観にふれて、

彼は自然を自然として高く観るより、却つてこれを、人間生活に味をつける、一種のツマカ、小道具みたくに考へてゐたと云つた方が、何うも妥当であつたやうだ。〔西鶴論稿〕二二九頁

と言ひ、又

つまり極端に云へば、自然をまづ享樂の対象として観た西鶴は、

一方にはまた微かながら、それを人間経済生活の背景であり、いろ／＼の意味での契機であるものとして、観ようとしてゐたのだ。「一目玉鉞」にも、

中田

此里のすこし西にあたつて、生田の森有、裾野は玉笹みだれ、細川より埋木ながれ出、香灰に焼也、

といふ種類の記述が、随所に認められた。さうした観方と、享樂的な立場よりの觀察とを主としてゐたところに、彼が如何にも元禄期の町人らしい立場から、自然を觀てゐたのであつたことが思はれ、従つて彼の捉へ得た自然の情趣も、主として享樂的な情調とか、貧富の生活雰囲気とかに、融け合つたものとして描き出された場合に、特に卓れたものを感じさせることが多かつたのではなかつたかとも思はれる。それへの鋭い感覺はあつても、彼は結局小説家であつて、自然詩人ではなかつたのである。(同右書、二三—三頁)

とも述べている。西鶴が自然を享樂の対象として見ていたことを強調するには疑問があるが、彼が結局、自然詩人ではなかつたということには、何人も異論がないところであらう。ところで、西鶴の自然觀にふれるとき、われわれは自然詩人たり得んとした芭蕉の姿と、西鶴のそれとを無意識のうちに比較しているのではなからうか。つまり、否応なく芭蕉と比較して、西鶴が自然を深くみることができなかつたのである。

しかし、考えてみれば、西鶴に向つて、自然詩人ではない、自然に対する眞の理解がない、ということと自体が本来無理でもあり、滑稽なことでもある。一度として自然の懷に抱かれた生活を経験した

ことのない人間にとつて、自然の眞の意味を理解することはなほだ困難だ、ということが出来る。土を離れて都市に出て来る人間には、まだしも自然を離れることの意味を理解することができるだろう。しかし、それから数世代を経て、まったく土の香の何たるかを知らない人々に、いかにそれを説明しても、自然が人間に与える喜びと苦惱を納得させることはできないのである。

西鶴の菩提寺であつた誓願寺には、彼の祖父が葬られていたという。とすると、少くとも西鶴は、都会人としては三代目にあたり、おそらく生れながらにして土の香や、自然の何であるかを知らない人間ということになるだろう。

今の都を清水の西門より詠め廻せば、立つゝきたる軒ばの内蔵の気色朝日にうつりて夏ながら雪の曙かと思はれ、豊なる御よの例松に音なく千年鳥は雲に遊びし。かぎりもなく打鬮き九万八千軒といへる家数は、信長時代の事なり。今は土手の竹藪も洛中になりぬ。それ／＼の家職して朝夕の煙立ける。(『本朝二十不孝』巻一ノ一「今の都も世は借物」)

等をはじめとして、
難波橋より西見渡しの百景、数千軒の間丸、薨をならへ白土雪の曙をうばふ。杉ばへの俵物山もさながら動きて、人馬に付おくれは大道轟き地雷のごとし。上荷茶船かぎりもなく川浪に浮ひしは、秋の柳にことならず。(『日本永代蔵』巻一ノ三「浪風靜に神通丸」)

等々に見られるように、すでに三都には自然とは縁遠い活気に満ちた都市が息づいている。江戸時代の人口は、全体的にみるとかつて増減しなかつたのがその特徴であるが、それでも元禄ごろまでは増

加の傾向にあった。特に都市は、実際には農村からの流入人口をかかえて段々膨張しつつあった。

……京にかぎらず江戸大坂のはし／＼明地野原まですこしの明所もなく人家に立つ／＼き何して世をわたる共見えねど。……『日本永代蔵』巻六ノ五「智恵をはかる八十八の升搔」

いうまでもなく、現代の都市の概念からは遠いにしても、その都市に発展すべき素地は、はっきり現れてきているといふべきであろう。右のような都市のただ中で、神社・仏閣を中心として残っている自然の風物が、自然本来の美と厳しさを失って行くのは当然の成り行きである。それらは、ただ人の心に余裕がある時だけの、又は、人々に四季の移り変りを思い出させる時だけの存在に化してしまふのである。さきの片岡良一は、

ことしもまた梅見て桜藤もみぢ
〔蓮実〕

入相のひ／＼き松の風淋しさも今ぞかし

ちるや桜愛らに茶屋があつたもの（真蹟懐紙）

等の句をあげて、西鶴の自然の見方が享樂的であることを強調した。しかし、人間の生活力におされて、自然は褪色することを余儀なくされているのである。すなわち、自然がその魔力を失いつつある時に、反対に人間生活はよりあわただしく忙しくなつて行くのであつて、それを「ことしもまた」の句に表現したのである。これを決して享樂的とだけは言えないのである。つまり、

さる程にせはしの世や。節季／＼は六十日の立事夢のごとし正月の掛鯛の山草すこしかる／＼とおもへばはや蓬売所軒の花菖蒲今も所々に見ながら。灯籠出す暮に胸も踊て蓮の葉の食ぬくもりもさめぬに又菊の書出し見ればおもひもよらぬ酔の出るもお

かし世に住付屈とてぬり台に小鯨魚一連又は千軒二十居て取違するは。今年も粟が高いと見えて算用づくの人心さもし。九月を過て大暮までは百日にあまれば、すこし愛にて息をするともえは常の物前と違ふて、大分の払ひかた……『西鶴織留』巻一ノ二「品玉とる種の松茸」

に見られる忙しい日常生活が現実存在している。つまり、ごく一般的な都会人が自然をふりかえることのできるのは、わずかに梅見・桜狩等の折節にすぎない。とすると、「ことしもまた」の句は、今年もまた例によつて世俗のあわたたしさの中に消え去つてしまふだろう都市の日常性に対する複雑な気分が籠められている。彼自身は、捨て坊主・隙坊主とみずから呼ぶように、僧でもなく俗でもなく、浮世の忙しさから逃れた俳諧師ではある。しかし、それはあくまで現実世間の忙しさを背景としたものである。「惣じて和歌に心をよする人はゆたかに年月おくらずしては甲斐ぞなし」〔西鶴名残の友』巻二ノ二「神代の秤の家」）と言いながら、浮世の忙しさに追われる人間を忘れ切ることができない。いな、むしろ世間に気兼ねのない隙坊主であるからこそ、世間のさまざま、人間の種々相を遠慮会釈なく眺め、描き切ることができた。つまり、都市の主体はあくまで人間であつて、都市生活を肯定した西鶴は、人間の生活のかけに小さくなり出した自然をそのままに描いたにすぎない。都市生活者としての人間に背を向けた芭蕉は、自然本来の美と尊厳とを求めて都市を出て行ったのだけれども。

だが、都市の周辺にあつても、自然が自然として独自の顔をとるもどす時がある。例えば「ちるや桜」の句は、こういった場合の都市生活者西鶴の反応を如実に表現している。すなわち、入相の鐘に

花の散る夕暮れ、衣装くらべさながらに着かざった女たちも帰途につき、桜狩りのにぎやかさが静まると、自然はむしろ本来の風姿をとりもどすはずである。ところが、このあたりの静けさに気附いた途端、酔も興も一時に醒め果てて、松の風が身にしみわたり、「淋しさも今ぞかし」ということになる。それ故、「爰らに茶屋があつたもの」は都会人の心細さの表現である、と見られるのである。都会人西鶴はこの心細さを押し切つてまで自然に接近しようとはしない。そこで急いで踵を返して人寰に帰るのである。当時の最大公約数的市民の感情がそこに見られるはしないだろうか。

『一代男』巻八ノ一「らく寝の車」で、末社連中が岩清水の夜宮に詣でるといふので、世之介が末社達のために車を仕立て、趣向をこらして出かけるという箇所がある。

一様に、水色の鹿子、白縮緬の、投頭巾を着て、四人宛二輛にのりて、一輛には樽折重香、枕箱燭台に、大燭燭を立、出口の門より、はや引懸、飲懸、なごりおしきは朱雀の細道すぎて、大みや通を南がしらにひかせ行、内裏様の園なればこそ、余所でなる事かと、有難くかたじけなく、寒る月の出れば、見わたす竹田の葉末に、夜あらしの通ひ、袖おのづからしめりて、なげかぬ泪かとおもはれ、引手の音もとまり、あまり慰すぎて、気鬱かりき。

興に乗じて、にぎやかに出かけたのであるが、京の街を出はずれると、夜道の風情にさすがの一行も興きめの態で、お互に黙り込んでしまふという有様である。歎棄尽きて哀傷生ずとはいふものの、この場合「気鬱さ」を呼び起させる契機が、冬の自然の物凄さであることは注意されよう。「ちるや桜」の句と併せて、人為的な世界に

のみ閉じ込められた都会人らしい神経の働きと、その弱さの露呈がみられるのである。

ともあれ、都市という特殊培養基の中の自然を眺める尺度で、都市以外の自然をも眺めた西鶴は、

競べ物なき富士の雪も。是はと詠た斗なり吉野の花も夜までは見られず。嶽捨山の月も世間にかわつて。毛がはへてもなし。

〔諸艶大鑑〕巻ノ二「簪紙は異見のたね」

と興ずるのであり、当時の都会人もまたこのような発想を面白がったであろう。卑小化された都市の自然を見られた目は、さらに自然を卑小化することによって都市生活者たる自己の優位を確かめようとするのである。

芭蕉はしかし、この卑小化された都市の自然を肯定することができない。彼が求めるのは人を感動せしめる自然であり、又、真に感動するみずからの精神そのものであった。そのためには、消費文化・物質文化にもたれかかった都会人の発想を払拭しなければならぬ。したがって、芭蕉には明かに自然を卑小化する発想とは正しく逆の発想が働いている。「旅人と我が名呼ばれんとか、身は竹斎に似たる哉などと詠する風狂の精神は、自己を極少のものとして天地自然のなかに点じて遊ぼうとする傾向がある。」(註8)と言われるところのものがそれである。こうして芭蕉は感動すべき風光・自然を求めて都市を後にせざるを得ないのである。

六

芭蕉は、都市の物質的・人為的な世界を支配する町人文化から脱却する方法として、自己の身辺から物質的虚色を取り払おうとした。

すなわち、深川の芭蕉庵入りがそれである。そうすることによって人間の創り出した物質文化に醜弄されるみじめさを克服して、自己の尊厳と個性を確立しようとしたのである。まさに、芭蕉において武士的な矜持が生きている、といったのはこの意味においてであつた。

此発句は、芭蕉江府船町の書に倦、深川泊船堂に入られしつゝぐる年の作なり。堂のうち、茶碗十ヲ、菜刀一枚、米入る、瓢一ツ五升の外不入、名を四山と申候

似合しや新年古き米五升

(鶴尾冠)

九年の春秋、市中に住侘て、居を深川のとりに移す。「長安ハ古来名利の地、空手にして金なきものは、行路難し」と云けむ人の賢く覚え侍るは、この身の乏しき故にや。

柴の戸の茶を木の葉掻く嵐哉

(統深川)

富家喰_二肌_一肉_二丈夫喫_二菜_一根_二予ハ乏し

(東日記)

雪の朝独り千鮭を噛得たり

乏しき侘しきの中に自我を置いて、これを形象化し得た時、芭蕉は詩においてみずからの人生を生きていることを発見したのである。西鶴が西鶴自身でもあり、同時に町人一般でもある複数的表現を逃れることができなかつたのにくらべると、そこに何と大きいへだたりが存在することであろう。俳諧においてみずからの人生を生きて、自らの生き方を問題にするということは、俳諧がもはや遊戯でなくなつたことを意味する。こうして芭蕉は、士的矜持を、文学において個人の可能性を創造するエネルギーに転嫁せしめたのであつた。やが

て芭蕉は、士的矜持を人間的矜持に発展させる課題を負う。

都市生活者としては、町人と同化する方向にあり、またほとんど区別することさえできなくなろうとしていた下級武士層や浪人たち、一時代前の文学の荷い手であつた僧侶や神官たちは、多くの場合経済力では町人に太刀打ちができなくなつていた。それだけに一層経済生活に醜弄される現実を脱却したいという希求が存したことは充分考えられる。そして、あまりに大衆化低俗化した談林俳諧への反撥も次第に底流となつてよどんできたに違いない。西鶴でさえ、その大衆化に呆氣にとられるような状態であつた。まして談林に酔い続けることのできなかつた人々が、芭蕉の俳諧を直ちに受け入れる素地はできあがつていたのである。

(四〇年・十二月)

[註]

1、広末保「元禄文学研究 増補版」『芭蕉』二二二頁

芭蕉の『貝おほひ』には、うまさがある。庶民的な可能性にふれていながら、しかも、それを文学として形象化してゆくのに、混沌たる現実の抵抗をさほどうけていない。貞門から一步ぬけだしていながら、しかし、究極において歌舞伎的な方法をなくしていない。むしろ、そういう方法を逆に生かしながら新しい世界に入つてゆくのである。小唄づくしの判詞から芭蕉もまた人間であつたなどということとは無意味である。同時に、『貝おほひ』に芭蕉の町人的な進歩性を機械的に指摘することも正しくない。これが芭蕉が談林へ入つてゆく方法であつた。

- 2、近藤忠義『西鶴』（日本古典読本第九巻）「研究篇」二七一頁。
- 3、広末保（前出）「西鶴」一七〇頁。
- 4、松谷昭彦「西鶴に於ける俳諧の理念——自註独吟百韻を中心として——」『西鶴・研究と資料 国文学論叢第一輯』所収。松谷氏は西鶴の俳諧理念が意外に旧いことを指摘されたが、それは単に職業的な姿勢のみでなく、彼の誇りともかわりがある。
- 5、暉峻康隆『西鶴 評論と研究上』六二頁。
文官にしてその功成りがたしといふ自問は、おそらく当時貞徳や季吟や立圃などの国文学者を擁し、中世歌学の伝統に立つ貞門から、さういふ学的背景のない町人たちのグループである西鶴一派に対して放たれた攻撃の一矢だったのであらう。
- 6、野間光辰『西鶴年譜考証』一五三頁。
岡西惟中以来、ほとんどの評者がほぼ同様の趣をのべている。
- 7、暉峻康隆（前出書）七〇頁。
- 8、森山重雄『封建庶民文学の研究』一二頁。